

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第三十九卷「社会科学（一の九）」

社会、国民生活（五）

風俗習慣、冠婚葬祭、年中行事、風潮、流行、国民性、都道府県民性

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第三十九巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、風俗習慣、冠婚葬祭、年中行事、風潮、流行等に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

謹賀新年

時空観と共感覚

明けましておめでとうございます

第一部 謹賀新年

第二部 三砂ちづるさんの考える「オニババ」について

第三部 謹賀新年

(編集集中) 現代日本社会の実相

第一章 国民の生活と行動

第一節 超少子高齢晩婚化社会

第二節 「一億総白痴」と「大衆迎合」

第三節 スマホ、ゲーム、アニメ

第四節 記念日商戦への参加

第五節 会話、応答の減衰と家族、友人、恋愛

第六節 男女平等社会の真偽 女性及びLGBTの権利

第七節 憲法、投票、右翼、左翼

第二章 国民の死生観

第一節 葬式ビジネスと横文字としての死(エンディング)

第二節 死者の埋葬と墳墓

第三節 新宗教系教団の実態

第三編 三十歳～三十九歳

第一部 謹賀新年

第二部 謹賀新年

第三部 「都民性」とは何か 憲法の「公共の福祉」規定から

考える・

第四部 謹賀新年

第五部 「歩きスマホ」をカント哲学から考える

第六部 謹賀新年

第七部 遅い？新年の挨拶

第八部 謹賀新年

第九部 新型コロナウイルス感染症の蔓延とニーチェ哲学

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの

第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

謹賀新年

二〇〇八年一月六日 起筆、擱筆、公開

明けましておめでとうございます。

およそ半年間、読んで下さっている皆さん、ありがとうございます。  
更新頻度はまちまちですが、今後とも少しずつ載せていきますので、  
よろしくお願いいたします。今年も色々と新しい挑戦ができればと  
思っています。

時空観と共感覚

二〇〇八年八月二十六日 起筆、擱筆、公開

最近、電車の中でしょっちゅう和服姿に出会うのと、北京オリンピック  
ツクがあったのとで、「時空と共感覚」ということについてよく考  
える。

和服を身に付けるとき、季節を先取りする、色彩や季節感を旧暦に  
倣う、という慣例や意識は、おそらく十代・二十代の若い人にはな  
くて、僕もその世代なのだが、自分の目がおかしいのかと思うくら  
いに、電車の中で浴衣の柄など見ていると、てんでバラバラで、目  
がとても疲れる。今の浴衣は、「着物・和服」とも「洋服」とも違う、  
別の衣装と見るべきではなからうかとさえ思ってしまう。でもたぶ  
ん、浴衣が悪いのではなくて、浴衣を着る人の姿勢と精神性の問題  
かもしれないが。今の「柔道」が、「柔道」でも「レスリング」でも  
なく「ジャケット・レスリング」と呼んだほうがふさわしいもので  
あるように。しかし、浴衣は別として、和服を持つこと自体が主流  
でないのと、季節感を楽しむどころか、その季節自体が環境問題等々  
で歪んでいることで、やむを得ないのかもしれない。

それはそれとしても、今現在「旧暦」と呼ばれているものは、日本  
史上一度も行われたことがない仮想の暦であって、我々が勝手に自  
分たちのかつての季節感を欧米の暦に乗せて、一ヶ月ほどずらして  
そう呼んでいるわけだけでも、思えば、我々の生活や文化あるい  
は人生そのものは、全て我々が所属する国家の定めるところの「時  
刻」「時間」「暦法」に乗っかって営まれるものであって、それらの  
とらえ方の民族間・文化間での違いは、共感覚のあり方に影響を及  
ぼさないはずはないのだ。先の「色彩や季節感を旧暦に倣う」とい  
うのは、「それらを天保暦以前の日本の暦に倣う」という言い方が正

しいと言える。

僕はこれまでに、「やがて」「さき」「のみ」「ばかり」「思ふ」「の」「見る」「聞く」「匂ふ」など、色々な日本語の単語と五感の関係を調べてきたが、例えば、日本語の「やがて」の共時的・通時的な分布を調べてみると、共時的には、西洋で「time」と「space」が分裂したときには、日本はまだ「時間」と「空間」が別物だと知らないから、「やがて」は「soon」の意味ではあり得ない。知らないというのはおそらく不適切で、日本が「時間」と「空間」が別物だったなんて、と仰天し始めた頃に、アインシュタインが「ごめん、やっぱり時間と空間と一緒にだったみたい」と言い出した。通時的には、日本語の「やがて」が時空分裂を引き起こし、空間の意味が淘汰されて、「soon」を意味するようになったのはいつかと調べてみれば、太陰太陽暦が崩れ始めた頃に一致する。逆に、「やがて」が「時空もろともそのまま」や「時空が相対論的に連続して」といった大和言葉本来の意味で使われていたときには、日本人は太陽暦を導入する気が全くないのが面白いところだ。

僕がこれまでに調べたのは、三十数単語に及ぶが、これらの使われ方は、中国から輸入して使っていた暦法を無視している。逆に言えば、かつての我々の日常語だけは、大陸の暦法に左右されないで数百年間も生き残り、やっと江戸末期に至って、暦法までが純日本製になって、日本語に見合うようになる。それが旧暦のもとになる天

保暦。そう考えると、太陰太陽暦の不定時法という暦法は、幕府が作ったというのは不適切で、日本の庶民はすでにそれで生活していた、つまり、むしろ日本民族の悲願だったと言って過言ではないようだ。

ところがどっこい、天保暦を採用した途端、黒船がやってきた。紆余曲折を経て開国、暦法を一気に欧米化させて、季節感を一カ月半ずらした。それによって、我々日本人は、自民族製の暦法を三十年間しか持たない民族となった。たったの三十年間。初めは反幕府方だった、土御門晴雄をはじめとする陰陽道のトップは、新政府ができたなら今度は新暦に反対して太陰太陽暦の存続を主張したわけだ。ようやく暦が純日本製になったのだから、農耕民族の面目をかけてそれを維持すべきだと。それほど、「時間が季節によって歪む」というのは、江戸時代までの日本民族の性に合っていたのだろう。

しかし、面白いのは、実際の貴族や庶民の生活は、純日本製の暦法以前も、必ずしもその輸入された暦法に一致していないことだ。実生活と日本語とは、中国の暦法とは別に動いている。和歌というものも、中国や朝鮮の暦法とは別に成立しうるものである。唐突だが、農耕は弥生のものだが、和歌の原型は縄文に有り、という僕の直観に一致するから、なお面白い。それが先ほども述べたように、江戸末期までの日本、あるいは和服文化が江戸から連続する戦前までの日本である。今は逆に、完全に和服のほうが太陽暦に飲み込まれた

と言つて過言ではないだろう。僕が電車の中で覚えた違和感、どうしてこんなに和服がピタツと来る人が少なくなつたのかという圧迫感のようなもの、それにいたたまれなくなつて、ふと「時空」ということを思い出したわけだ。

有史以来初めての純日本製の暦が不定時法であつたことからして、江戸末期までの日本には、スポーツなる概念や、時間と空間とが「time」や「space」であるという感覚は、全く存在しなかつたというのが適切だと思う。外発的にでない限り、スポーツというものをやる気がなかつた日本民族。同じ日照のときを同じ時刻にして時空のほうを歪めるのが日本人である。冬至の明け六つはほとんど夏至の朝五つである。

藤原氏の摂関政治から徳川綱吉の治世、大老堀田正俊の暗殺の時代まで、有史の半分近くに当たる800年間くらいを輸入品の宣明暦によつて営んできたわけだが、純日本製文化が花開いた江戸時代のとどめとして、中国からの暦の輸入をやめて、純日本製の暦を作つた、それが旧暦のもとになる不定時法の暦だつた。1850年の時点ですんなることを民族レベルでやっているのは、日本と一部のアジア・アメリカの先住民族のみである。欧米の植民地になつた土地の民族は、当然そこに入らない。天保暦では、昼と夜、春夏秋冬によつて時間がぐにやぐにや歪むので、当然、スポーツなる概念も存在しない。スポーツなる概念がある民族において成立するには、その民族が用

いている暦が月よりも太陽を見ていることが必要である。そもそも、「人間が100メートルを等速直線運動するタイムを計測する」ということが、江戸時代までの日本人にはできない。つまり、オリンピックに出られない。その頃の中国はと言うと、オリンピックが開けるような暦法によつて国家運営をしているのだから不思議なものである。逆に言えば、そういったこと以上に重要なあらゆる要素が、日本人の生活にはあつたことである。むしろ、今現在漢民族に虐げられている中国内の少数民族と、江戸時代までの日本民族とは、時空と暦法に関しては、示し合わせたように同じ世界観を持っていたようである。日本人は月の満ち欠けにやたら拘泥するので、夏や冬が一ヶ月増減するくらいは何てことはない。それで「閏月」を設けて、一年が十三ヶ月になるときがある。太陽が出て暑かつたり、出ていなくて寒かつたりするのは、我慢して和服の色彩や生地や重ね方を変えて楽しめばいいんで、それよりもとにかく、月が満ちるとのか欠けとるのか、それが知りたくてしょうがないのが日本人というわけである。

例えば「spring」は、本当は「春」ではなくて、「春分から夏至」のことで、「春」は「立春から立夏」のことだから、英語はじめ欧米文化は太陽の幾何学的・天文学的な位置によつて季節を分けているが、江戸時代の日本人はそんなことはどうでもよいと思つたから、世界の定時法に反抗する天保暦が作れた。たいした度胸である。それは、換言すれば「視覚偏重」に対する「共感覚」の復権ということでも

あった。大和言葉の「やがて」や「さき」の復権でもあった。それが明治に入って崩れた。崩れてしばらくは、庶民だけは天保暦の感覚を体に残した。それが大正・昭和に入ると、三〇五月が春、という、今に近い季節感に変わった。ただし、そうしたところ、平安時代にも江戸時代にも存在しなかった和服の色彩感が、なぜか新暦のもとに出てきた。この時代までの日本の庶民は偉いと僕は思う。新橋色だの藤鼠色だの、ああいった色彩である。7月22日の研究もある程度は大正・昭和の色彩を取り入れている。

<http://ij-art-music.sblo.jp/article/17226219.html>

そう考えると、スポーツが日本人にとって、「自分の精神性」や「勝ち方や負け方へのこだわり」よりも「他人との競争」や「勝敗そのもの」ととらえられるようになったこと、あるいは、僕と同世代の人の和服の色彩や季節感に、どう考えても日本というものが感じられず、振袖や浴衣を着るということの中に本末転倒が見えるようになったこと、それらは、本当に戦後のたった数十年間のうちに、一気に起こったことなのかもしれない。北京オリンピックと、電車の中で見た浴衣とから、ふと同じ圧迫感を感じ、それがどこから来るのかに自分で関心があったので、書き留めておく。あるいは、時空観や季節観といったものは、前回まで三回分の記事の内容とも深く関わってくるだろう。

明けましておめでとうございます

二〇一〇年一月四日 起筆、攔筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリックドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けましておめでとうございます。

本年もよろしくお願い致します。

## 第一部 謹賀新年

二〇一一年一月二日 起筆、攔筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリックドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けましておめでとうございます。

本年もよろしくお願い致します。

## 第二部 三砂ちづるさんの考える「オニバズ」について

二〇一一年一月七日 起筆、擱筆、公開



『オニババ化する女たち 女性の身体性を取り戻す』（光文社新書、二〇〇四）を改めて読んだ。

出版された時点で読んでいた本ではあったのだが、最近著者の三砂（みさご）ちづるさんとお会いする機会があったことと、自分の「女性の排卵・月経などが察知できる感覚」と関連付けることができる点を探してみようという思いがあったことから、以前よりも精読した。（僕自身は便宜上、この感覚を共感覚の一つと見て「対女性共感覚」と名付け、初著でもそう書いた。）

「オニババ」というタイトルを見た当時は、「挑発的なタイトルだな」と思ったものだった。

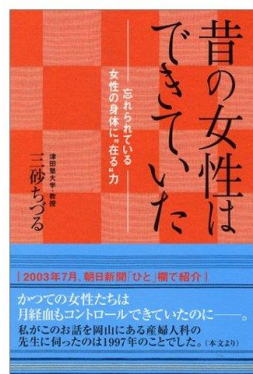
しかし、読み返してみた今、「ヤマンバルック」や「汚ギャル」という言葉が流行したくらいだから、本来の女性らしさを失っている

（と三砂さんや三砂さんに賛同する女性自身がお思いである）日本の女性を「オニババ」と呼んでみたところで、何か女性に対して失礼に当たるとは感じられなかったし、むしろそのような響きはもはやあまり効果を持たない世相だろうという気さえした。

さて、『昔の女性はできていた——忘れられている女性の身体に“在る”力』（宝島社、二〇〇四）というご著書の中では、日本女性や太古社会の女性にできていたと三砂さんがお考えになっている習慣（自分の月経や排卵が察知できる、月経血を溜めてトイレに行っ出す、など）が細かに挙げられている。

もちろん、これらの能力の全てを持っていればそれで良いとは限らない。昔と今とは食べ物も違う上、身長も平均で十センチ伸びているから、安易に比較はできない。

ただし、昔の日本女性にそのような能力があったとするなら、それに対応する男性の能力も昔の日本男性にはあったはずだというのが、そもそもの僕の考えでもある。僕の「対女性共感覚」は、三砂さんのような教育者の女性や医療関係者の女性、巫女さん、主婦、お年寄りの女性などが注目して下さることが多い。



三砂さんのように、和服をお持ちで、それで日常生活を送ることなどは、今や一部の女性にしかできないことだとは思う。和服で通ってよい学校や職場などほとんどないし、和服を買いお金があるなら明日の食費に使うというのが、ほとんどの女性の正直な心境だと思う。そのような女性の行動だけをもって非文化的・非教養的・非日本的な生活であると言うことはできない。

このような不況下で「私はそうではない」と断言できる女性が大多数であったなら、むしろ不自然だという気がする。

それは確かにその通りで、日本的なモノを所有することが日本的なヒトであることだとは限らない。ただし、そのことは差し引いて考えるにせよ、ともかく、廃れていつている日本の男性・日本の女性の特徴があるとすると、そのことには寂しさを感じるというの、また僕の正直な心境である。

三砂さんの著書には今でも賛否両論ある。実際、三砂さんの著書

を読んで反発を覚えた女性は多かったようだし、Amazonのレビューにもむしろ傷ついた女性からの切実な悲鳴と批判が見られることや、僕の周りでも「三砂さんの言葉は、私にはちよつときつい・・・」という感想を述べた女性がいることには、僕も注目している。この点ばかりは、三砂さんの論理が勝利しているわけではなく、反三砂派の女性にもかなりの分がある。

なぜ一部の若い日本女性がそのような反応になるのか、(個人的には三砂さんの著書の内容の大半に賛同できることを断った上で、)今回はあえてそういった日本女性の味方を書いてみたい。

三砂さんの「女は、男から愛され、恋愛・結婚・妊娠・出産することが幸せなのだ。それを忘れている今の日本の女はオニババになるのだ。ナプキンなんて本当はいらぬのだ。おおらかに和服生活をして、女性の性の喜びを味わって生きるのが本来の姿なのだ」という主張は、むしろ、「心から愛し愛される男性に出会うまではそれらの機会(結婚・妊娠・出産)を大切に後々までとっておく」という慎重で丁寧な女性にとっては、逆に心の傷になる可能性があるということだと思う。

三砂さんの文章を引用しておく。

「結婚において相手をこと細かく選ぶようでは、だめだと思えます。誰かとともに暮らすことを第一にして、とにかく縁があった人と、誰でもいいから結婚するというぐらいが、大事だと思います。」

『オニババ化する女たち 女性の身体性を取り戻す』p184)



一部の若い女性が言うように、三砂さんのこの「恐るべき」「のんきな」主張は、「三砂さんが恋愛・結婚・妊娠・出産・離婚を経験され、大学教授という社会的地位に就かれ、日常生活で和服を着るだけの余裕をお持ちだったからこそ、できた主張」であるかもしれない。

「女は、男のように社会に出てがつがつと働くべきではなく、結婚し、自分の体と向き合い、控えめに生きるべきだ」という控えめでない主張を世に広めるだけの力は、確かに、すでに男性と対等な社会的地位を有する女性か、精神的・経済的に余裕のある女性しか持ち得ないのが事実だろう。

「今から私も、すてきな恋愛をして、すてきな仕事を見つきたい」と思っている若い女性は、むしろ「今の女は、男のように社会に出ないと大変なことになる。私も焦らなければ・・・」と思うばかりで、三砂さんのような主張をおこなったり受け止めたりする余裕さえないのが現状だと思う。ただし、三砂さんご自身もこういった問題には気づいていらつしやると感じた。

今後は、三砂さんと同じ感性や問題意識を持っているがゆえに、かえって一生涯子宮を使わない女性も増えていくはずである。しかし、それでもよいではないかと僕は思う。

三砂さんは、『オニババ化する女たち』の中で、生理や生理に伴う暗い気分のことを「卵子のかなしみ」と呼んでいる。これは僕がとても好きな言葉だが、しかし、その「かなしみ」が分かる心を持つ

てさえいれば、「女性らしい女性」だと言えると僕は思うが、いかがだろうか。

これだけの格差社会だからこそ、子宮に子どもを宿したことが無くとも、「この女性は子どもを産んだら、良い母親になるだろうな」と男性に思わせるような女性であるというだけで、妊娠・出産は疑似体験したことになるのではなからうか。

もし三砂さんと全く同じ感性や問題意識（いつまでもいい女でいたい、恋愛していたい、子どもも欲しい）を持つていたとして、実際にそれが実現できているかどうかを女性に問うのは、かなり酷なものがあると思う。

「周りの同世代の女性ができちゃった婚・離婚を繰り返すのを見て、自分は社会の風潮・流行から遅れているのではないかと苦悩しながらも、それでもやはり長続きする結婚生活を求めて慎重になっている女性は、オニババの定義から外すべきである」という、僕がいつも主張しているような内容は、三砂さんの著書には、なるほど、確かににはつきりとは登場しない。

おそらく、三砂さんの著書を読んだ「まじめな」女性は、その点に屈服させられ、傷を負った可能性があると思う。僕は、三砂さんの著書が図らずも巻き起こした皮肉な世論をそう読み取った。

その意味では、「結婚・妊娠・出産の喜びは、実際にそれらをやってみない女性には分からない」という、三砂さんの世代以上の女性によく見られる言い回しは、かなり残酷でもあると思う。

せっかく女性を元気づけるために発せられたはずのこの言葉は、

むしろ三砂さん自身と同じ感性と問題意識とを持っているはずの一部の未婚の日本女性の耳には届かず、届いたとしても浅からぬ心の傷を残し、逆に、早々と「カレシ」を作って妊娠していった奔放な女性の耳に「勝利感」として先に届く可能性が高い。また、残念ながら、実際にそのようなになっているようである。

だから、これからの課題は、三砂さんのような社会的地位や恋愛・結婚・妊娠経験のない日本女性がどうやって「心の救い」を見つけるか、ということではなからうか。そして、そのために男性がやるべきこともあるのではないか。

このえも言われぬ「日本人の世代間の価値観の齟齬の残酷さ」について語り、解決の糸口を見つけていくことが、僕が自分の冒頭の「対女性共感覚」を告白したときから思い描いている最終目標でもある気がした。将来的に、結婚・妊娠・出産を望みながらも叶わず精神的に傷ついた女性の層と、すでに社会的名声を得て自由に女性論を主張できる三砂さんのような女性との間に入って、うまく仲裁するような活動でもできたら本望だ。

あともう一つ。就活（就職活動）と恋愛とを同一視したら怒られるだろうが、少しくらい、以下のような考え方も許されるだろう。

恐ろしいことを書くけれども、ここ最近の統計の動向から言って、来年度に就職する新卒の四割近くの人は三年以内に（二〇一四年までに）その職場をやめるか転職することになる。

その三年の間にやることと言えば、上司の顔色を伺いながら懸命に仕事を覚えることであって、心に余裕を持って散歩に出かけるこ

とでも、文学に親しむことでもない。しかも、三年後に優先的にその職場で上の地位に上がっていくことができるのは、「仕事ができるが控えめな性格の女性」ではなくて、「仕事ができる社交的な性格の女性」であると思う。

もし、娘に「どこでもいいから早く就職しろ」とけしかけている母親がいたら、娘に「どの男でもいいから早く一緒になれ」と言うかどうか考えてほしい。物事というのは、一見すると違うようで、かなり似ていることがあるのではなからうか。

せっかちな人は何事もせっかちであるし、落ち着いた人はいつも落ち着いているものだと、僕は感じる。落ち着いた恋愛を求める女性が就職にせっかちであろうとすることは、せっかちな恋愛を繰り返す女性が落ち着いた就職をしようとする事と同じくらい、困難で不自然なことではないだろうか。それは、男性にも言えることだと思う。

### 第三部 謹賀新年

二〇一二年一月四日 起筆、攔筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリックドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けましておめでとうございます。  
本年もよろしくお願い申し上げます。

### 第三編 三十歳〜三十九歳

#### 第一部 謹賀新年

二〇一三年一月一日 起筆、攔筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリック  
ドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けましておめでとうございます。

本年もよろしくお願い申し上げます。

#### 第二部 謹賀新年

二〇一四年一月一日 起筆、攔筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリック  
ドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けましておめでとうございます。  
本年もよろしくお願い申し上げます。

### 第三部 「都民性」とは何か 憲法の「公共の福祉」規定から

#### 考える・

二〇一四年六月二十七日 起筆、攔筆、公開

この記事では、「東京都民性」（または、東京首都圏全体を含む広義の意味で使われる「都民」としての「都民性」というものがある）とすれば何か、私なりに最近考えていることを中心に書いてみる。特に、東京首都圏で生まれ育った都民ではなく、首都圏外から移住したか首都圏に一時的に在住している都民のそれについて、最近個人的に意識している新宗教問題と関連付けて考えてみたいと思う。

#### ●都民の絶妙な「沈黙」

常々、「無宗教・無党派層の一員だが宗教・新宗教ウォッチャーです」教などという宗教の信者を自称している、野次馬の私としては、最近では色々印象に残る出来事が多い。（この自称宗教の名称は、意

図や内容さえ示すことができればいいので、いつも変化してしまっているが。）

二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、JR山手線の品川駅と田町駅の間に新駅が建設されることが決まり、国や東京都は駅名の検討に入っているようである。

先日、とあるマスメディアを仕事で訪れたところ、この新駅名候補に「幸福の科学前」が出ていると知り、ああ、確かに近いなと思いつつもさすがに仰天したのだが、もし表沙汰になったところで、都民が全力を挙げて阻止するはずだと思って、それ以上は気にも留めなかった。もちろん、私も一都民として阻止する。（と、そう思っているうちに、その話は立ち消えになったようである。）

しかし、こういう話が全くあり得ない話ではないことは確かだ。天理教に由来する奈良県天理市・天理駅、金光教に由来する旧岡山県浅口郡金光町・金光駅などの前例がある。タブーでも何でもない。あれよあれよという間に、新宗教都市は形成される。

この手の話題で最も有名なのが、もちろん中央線の信濃町駅である。この駅を中央線に揺られながら通り過ぎる時も、いつか「創価学会前駅」になったほうがよいのではないか、などとわざとらしく思いながら通り過ぎていく。何と言っても、ほぼ二つの字（あざ）全体が、国民の意志・投票によって現政権を取っている政党の支持母体の町であり、駅の広告もこの宗教法人のもので彩られている。信者が経営する商店なども多くある。こういう区域があること自体は、「法の支配」がある限り、どこまでも合法なのだ。

天理市をめぐるっては、時々実施されるアンケートでも、天理市民のほとんどが、自治体・駅名・市政・公共サービスなどにおいて特定の新宗教団体の思想が色濃いことについて、「何とも思わない」・「不満はない」と答えている。

現在のところ、ある字（あざ）や地域一帯の土地や建物を特定の新宗教団体が占有することが、憲法第十二条や第十三条に規定される「公共の福祉」規定や、憲法を根拠に主張される環境権・眺望権・景観権などに反するという解釈は、存在していない。

この天理市民の回答は、高齢の天理教信者とその子孫が市内に集住を続けていることと、宗教に関心のない若年者（特に学生。天理教信者の子供を含む）が全国平均の二倍も市内に在住していることから来ていると考えられる。ただし、高齢の信者はもはや最期までそのつもりであるだろう一方で、若年者の中には、単に通学や通勤でそこに一時的に住んでいるだけで、いずれどこかに転居する身である人も多いはずだ。おそらく、「天理市」の由来さえ知らない若年者も多いと思う。

私の出身地の岡山県には、幕末三大新宗教と呼ばれた三つの新宗教のうち、金光教と黒住教の本部がある。（もう一つは天理教）

特に金光教は、自らをその名の由来とする金光町（二〇一四年現在には浅口市の一部）に小規模の宗教都市を形成し、金光駅自体がこの宗教への玄関のようだった。

儒教的幕藩体制による伝統的神道・仏教への抑圧が終焉して国家神道・教派神道の整備と廃仏毀釈が行われた明治時代から、オウム

真理教による各事件によって宗教カルト問題と破防法の適用の可否の議論が頂点を迎える時代までの約百年間の、ちょうど後半期（ほぼ戦後に該当）に見られた、日本の一地方の光景と言つてよいと思う。

規模としては天理教のほうが大きく、天理市自体が、市長や市議会議員が天理教信者であるか否かにかかわらず、天理教を中心とする宗教都市を標榜している。

ところが、東京都民の内面や宗教意識となると、地方の人々のそれらとは全く逆の現象が起きる。

一年ほど前、仕事で英国大使館へ行くため、東京メトロ半蔵門駅を降り、最寄りの4番出口を出ようとしたら、新宗教団体真如苑のビルを通過しなければ出られないことに気づいたことがあった。最近新設された出口である。

一般利用者のほとんどは、全く知らないか、知っていても「新宗教施設の存在を無視する（いわゆる俗語で「シカトする）」ことによつて通勤・通学などの行動を取っているようである。事あるごとに新宗教を利用して市や町を上げて祝祭的気分を作り上げ、盛り上がる地方とは、その点で異なっている。

ただし、表向きは都民のほとんど誰からも不満が出ない信濃町駅はともかく、半蔵門駅のようなケースはかなり問題だと思つう。

特定の宗教法人の建造物の内部を通行する出口を鉄道事業者の主導または容認の元に設置する時、憲法の「公共の福祉」との関係はどうなのかと疑問に思い、色々と調べてみたが、結局、最近の石原

伸晃環境大臣の言葉として話題の「最後は金目」、つまり、「鉄道事業者と宗教法人の双方に利益があるからそうした」という結論しか見えてこず、愕然とした。

もつともここでは、一般利用者は、「信教の自由」を侵害されているわけではない代わりに、新宗教団体の建造物内部をそうと知らずに通行したり通行中に勧誘を受けたりしたことによつて、通行妨害の被害を受けたり気分の悪化や苦痛感を覚えたりしているのであるから、「公共の福祉」規定や自治体の迷惑防止条例のみが関係してくることになる。

特に、当該宗教法人の信者の利用や一般利用者の当該宗教法人施設への誘導を目的とすることが明らかであつて、そのことが利用者のコンスタントな増加という利益を鉄道事業者側にもたらし、そのことを鉄道事業者も利用客に隠しているケースについては、憲法との整合性をもつとまじめに考えるべきだと思つう。

（それ以来、しばらく別の出口から遠回りして出てみたが、こんなことで自分一人だけ動きを変えるのも、歩行者の流れに逆らつて迷惑だなと、我ながら可笑しくなつた。）

冒頭の新駅名候補については、おそらく、新駅建設予定地の隣の泉岳寺駅が、泉岳寺境内からある程度（幸福の科学の建物よりは）距離があるにもかかわらずそう名付けられていることと、泉岳寺が関府六箇寺の末寺として曹洞宗寺院の統括と江戸僧録を司つた経緯があることから、曹洞宗の系統でない各新宗教団体による曹洞宗泉岳寺と京浜急行への反発が関係しているのかもしれない。

（余談だが、元々日本の曹洞宗という宗派は、新宗教思想やカルト思想が出にくい宗派である。これは、いわゆる「魂（靈魂）」についての考え方の相違によるもので、それらが出やすい宗派には浄土真宗や日蓮宗・日蓮正宗があるが、このあたりのことは宗教学・仏教学上のテクニカルな話になるので、省略する。）

ただし、曹洞宗関係の駅名だからと言って、それを理由にこの駅を利用しなかったり、この駅を利用するたびに怒ったりする浄土真宗信者や日蓮宗信者は、今やほとんどいないと思う。

● 「都民性」なるものがあるとすれば・・・

色々と憲法との整合性を問われそうな例を挙げたが、私はこれらの問題を見るにつけ、全国から集まった雑多な人々の集合体である都民の絶妙なバランス感覚の面白さを感じる。

おおまかに見ると、「都民のバランス感覚と国・都の旧態依然とした体質との乖離」および「都民のバランス感覚と地方の高齢者の旧態依然とした体質との乖離」の二点を感じる。

まず、一点目。オカルトブーム全盛期で、なおかつ地方ほど新宗教団体に抵抗感のなかった一九八〇〜九〇年代前半にあつて、オウム真理教を母体とした真理党の候補を軒並み落選させたように、都民は「怪しいものは知ったことか」と、冒頭に挙げたような駅名候補なども無視するに決まっている。

ところが、今見たように、J・R・東京メトロなどの鉄道事業者や国・自治体は、新宗教団体との蜜月関係があるし、あまりこの話題に関するバランス感覚は期待できないと思ってしまう。

この手の話題を今の大学生や同世代の同僚に振ってみたら、このこと自体については、私個人としては極めて不満だが、彼らは彼らで「自分に関係がない物事は知らない、頭の中に意見・価値観・宗教観そのものが存在していない」ということによって絶妙な中立的立場を都内・都会において形成し、非常に器用で華麗な投票行動を見せているのかもしれない。

そろそろ「宗教法人性善説」そのものを放棄する必要があるとも言えると思うわけだが、その一環として宗法人の税制優遇を廃止して莫大な税金をかけたところで、新宗教団体よりも先に地方の小さな神社や寺がつぶれるに決まっている。むしろ、伊勢神宮を本宗とする巨大宗法人の神社本庁や大規模な単立宗法人（靖国神社など）は話が別である。

それに、新宗教団体がつぶれたら、まずは政治家や政党が困る。自民党や安倍首相は統一教会・国際勝共連合がなくなったら困るし、公明党は創価学会がなくなったら困る。石原慎太郎や石原伸晃や平沼赳夫や日本会議は、霊友会、崇教真光、念法真教、神道政治連盟などがなくなったら困る。社民党は、今やほとんどそれ自体が女性優遇思想党である。共産党は、元々それ自体が思想である。何も民主党だけが、朝鮮半島に媚を売って外交政策や政権運営に失敗した

わけではないのではないか。自民党も、朝鮮半島の新宗教団体の恩恵を受けて成り立っているのだから。

結局、JR山手線の新駅名は、「芝浦」・「芝浜」など地名に由来する従来型のものか、「オリンピックシークサイドたかなわ」や「大江戸みらいベイパーク」などの、日本人にも外国人にも分かりにくい、いわゆる「キラキラ駅名」になりそうな気がする。

二点目。多くの日本の都会人（特に東京都民）が新宗教問題や「公共の福祉」問題に無関心であり、付和雷同して人ごみの中を移動しているということ、すなわち「意見そのものが脳裏にない」ということよってかえって中立的立場が適切に現出されている、という性質を「東京都民性」や「日本の都会人性」そのものだとすれば、これは日本の地方の金縛りのような宗教意識と対比的に見ることができそうだ。

すなわち、天理市や旧金光町のようなケースは、今の東京ではまず起こり得ない事態であり、世田谷区一体や吉祥寺の街の周辺が一つの新宗教団体を基盤として再形成されるなどということは、まず近い将来にはないと思う。

日立市や豊田市のように、特定の企業名が地方自治体名となっているケースでは、日立市に三菱電機ファンや東芝ファンが住んでいるから、豊田市にホンダファンや日産ファンが住んでいるからと言って、この人たちが日立市や豊田市の市役所に文句を言いに行くなどということはありません。過去にはまじめにそういう行動を取った人もいただろうが。

しかし、新宗教団体名、しかも神道・仏教・キリスト教・イスラム教などのように国内外の政府によって（多少定義は違うものの）カルト指定されていない正統派巨大宗教団体ではない宗教団体の名を、自治体名や駅名に据え置いたり新たに付けたりするようでは、今後ますます日本人の宗教感覚や「公共の福祉」感覚は、海外から見ても摩訶不思議なものになっていくと思う。

これは、ヨーロッパやアメリカの自治体名や駅名に、古代ギリシヤ・ローマの神々やキリスト教関連の用語が付けられているのとは、わけが違おうと思うのである。あちらでは、国家・文化自体が宗教的・一神教的であり、しかもそれは正統派なのだから。

だから、東京都は東京都で、オリンピックの開催都市としての矜持を持って、国・都や地方の高齢者の旧態依然とした宗教感覚や「公共の福祉」感覚とは異なる意識を持たなければならぬと思う。

### ● 結び

ともかくにも、今回言ってみたかったのは、一般都民の付和雷同体質は、政府・自治体や地方の高齢者のそれよりも、かなり健全なものではないか、ということだ。都民は、その付和雷同・無関心体質の絶妙な器用さによって、憲法が規定する「公共の福祉」を図らずも体現していると思う。

不思議とバランスの取れた、およそ「意味」というものを持たな

い、雑多すぎて結局何も「語らない」、意見がなさ過ぎるために放っておけば勝手にオートマッチクに調和が取れる、無味乾燥の、ニュートラルな都民の世論。これが最近、私自身の頭の中では、思索の材料として気になるテーマである。

【参考文献】

宗教法入法

<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S26/S26HO126.html>

宗教法人と宗務行政

<http://www.bunka.go.jp/seisaku/shukyohojin/>

第四部 謹賀新年

二〇一五年一月二日 起筆、攔筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリックドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けておめでとございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

げます。

第五部 「歩きスマホ」をカント哲学から考える

二〇一五年十二月十八日 起筆、攔筆、公開

ブログの更新は久しぶりである。時間はあるのだが、サイトやブログに意識がなかなか向かないのが主な原因である。来年二月頃からは、意識が向く予定である。ただし、予定は未定である。

そんな中、あくせくと街を歩いていて色々と思うことは多い。社会観察の好きな私である。一応、哲学専攻だった身として、最近感じていることを一つだけ書いておく。

最近いわゆる「歩きスマホ」が流行し、メディアでも問題視され報道されているので、街を歩くときにも自然に歩きスマホをしている人に目が行くようになった。と言っても、街のど真ん中では、歩きスマホが視野に入らない瞬間を探す方が難しい。

入力が面倒であるので、今私はこのような人間を「歩スマー（ホスマー）」と呼称させてもらう。また、「歩きスマホ」は「スマ歩（ホ）」とさせていただく。入力が面倒というのは口実で、実は皮肉を込めた批判としての略語である。

一見すると笑い話のようであるし、確かにユーモアを込めている部分もある。しかし、歩スマーが自分でホームから転落したり人か



ら注意されるのは自業自得だとしても、人にぶつかって怪我をさせたり、それで人の命を奪うような場合もある。人の命に関わる重大な社会問題の話なので、どうしても書いておきたい。

### ●歩行距離や運動の問題

そうして観察を続けたところ、歩スマーではない自分がいかに日常的に蛇行しているか、いかに無意識に気を遣い苦労して、歩スマーを避けながら歩いているかということがよく分かるようになった。最近はこのような歩き方をしている人たちは皆、真のボランティア、善人だと思うようになってきた。

おそらく、同じ距離を歩くにも、歩スマーよりも非歩スマーのほうが一・〇五倍から一・一倍くらいの距離は歩いているのではないかと思う。新宿・渋谷・池袋などの人口密集地帯では、ほぼ真横に避ける羽目になることもあるので、一・二倍以上は自分の方が歩いていると思う。となると、歩スマーは知らず知らずのうちに、外出時の運動・ダイエット効果もずいぶん失っている計算になる。

歩スマーは、歩行スピードが遅いのに、通行ルートと脚の動きが直線的だし、目線も一点凝視型だ。筋肉に負荷がかからず、歩く距離も短く、脚部の横方向へのふんばりなどが、高齢期に至って急に弱くなることが予想されると思う。

後ろから歩スマーを追い越すときも、結局は、自分の方がややこ

しく変な動きをして追い越すことになる。どのタイミングで追い越せばよいかにも、頭を悩ませることになる。歩スマーには、少なくとも歩スマーでない我々にはあるような「後ろから誰かが来ている」という直観、「自分のせいで困っている人への申し訳なき」、日本語で呼ぶところの「気配」や「空気」への知覚能力が欠落していると思う。

スマ歩推進派は海外にもいて、「スマ歩は第六感を養う」などとする論文まで出ているが、見てみたところ、かなり怪しくて、不謹慎ながら笑ってしまった。周囲の人たちがよけてくれる親切さを、歩スマー側の第六感によるものと曲解して、無茶苦茶なデータを引用している。むしろ、第六感や動物的直観があるのは周囲の人たちの方だと私は思う。

石器時代や縄文時代、というより昭和時代のつい最近まで、猟・漁をするときには、横方向への敏捷性などの基礎的能力が必要だったはずだが、歩スマーはそのような動物的な動き、前方注意、危険察知、事前の歩行位置の横方向への修正、方向転換というものを一〜三メートル以内に近づくまでほとんどしてくれない。だから、全てをこちらがやらないとどうしようもない。

万が一「一億総スマホ社会」になって脚部・臀部・腰部の動きが根本的に変わっていくと、未知の症状も出てくるのかもしれない。しかし、一番問題なのは、歩スマーの危険性そのものにはかならないが。

歩スマーに出くわすたびに、なぜ自分がよけなければならないの

かと憤りを覚えていたが、自分の方が忍耐力や敏捷性などを劣化させないで済むのだという、やたらと冷静な医学的・生物学的視点で考えるようになってからは、多少は憤りもなくなってきた。

●注意警告への気づきの問題

スマ歩は、鉄道事業者やスマホ事業者も問題視しているし、スマ歩禁止のポスターも色々なところに貼られるようになった。だが、ポスターを見るのは「顔を上げて、ポスターを必要としない人たち」なのだから、本当に意味があるのだろうか。

歩スマーは、ポスターを全くまたはあまり見ていないか、見ても無視しているか、歩きスマホができない人の方を「不器用だ」、「前方を注意して自分を避けてくれるべきだ」と考えているか、のいずれかだと思われる。

そうなると、歩スマーは、スマ歩に限らず、読書や人付き合いや仕事の仕方もいい加減なのではないかと思えてくる。そう思われても仕方がない。

●歩きスマホしなければならぬような重大事案かどうか

スマ歩する以上は、歩いているときに親族危篤の一報が入ったと

か、上司からメールが来て早急な返信が必要だとか、今からデートの予定のところ悲劇の破局のメールが来て、足も涙もとどまるところを知らないとか、そういった緊急事態かと思いきや、私の横目に見えた歩スマーのスマホ画面は、五〇%くらいがゲーム画面、三〇%くらいがラインなどのSNS画面である。

歩スマーはセキュリティ意識も甘くなるようで、他人が画面を見ようとしなくても見えてしまう点も問題である。

こういったスマ歩ゲーマーが歩行の列の先頭にいるだけで、後ろ全員が引つかかるのである。あるいは、私の前方を歩く五人全員が歩スマーで、六人目の私が憤りを覚えながら歩いているようなケースも頻繁に起きている。

そもそも、前述のような重大事案に迫られて真摯に対応できるような人たちは、最初から立ち止まり、道の端に移動してスマホを触ることのできる人たちであるはずだ。

●せっかくの「無意識の善行」がはらむ危険性

警告自体に気づかないのは歩スマーの自己責任の問題だが、同じく問題なのは、我々のような非歩スマーが「無意識によけている」という点だと思う。哲学になるのはこの部分である。

何となくでも腹が立ちながらよけるなら、まだ相手に対するマナー遵守の要求のニュアンスがこちらの顔の表情や態度のどこかに出

るし、道義的な威圧効果もあると思う。

事実、「そつちがよけないとこつちから当たってやるぞ」という念を込めて近づくと、何となくそれが相手に伝わり、相手も気づいてよけることがある。

自分一人のときにはやらないように気をつけているが、自分の後ろから高齢者や小さな子供や障害者が歩いてきている（車椅子でついてきている）ことが分かっているときは、自分がよけたら後ろが危ないので、歩スマーが歩きにくくなる位置（私を迂回しなければ私の後ろに通り返けられなくなるような位置）を意図的にいかめしい態度で歩いているのは確かである。

しかし、よほど意識していないと「無意識によけてしまう」親切さを日常的に繰り返す私のようなタイプの人たちがいる限り、それは歩きスマホへの一種の加担だし、いつまで経っても歩スマーは堂々と歩き続けることになると思う。そんなことでは、道徳と反道徳が反転してしまう。理屈の上では、自分が人の命を軽視しているのと同じだ。

#### ●カントの善を思う

このような無意識的善行は、本当は哲学者カントからすれば、理想的な道徳律の体現であるかもしれないし、善人の見本であるかもしれない。真のボランティア精神かもしれない。

しかし、ここは心を鬼にして、カントに失礼をして、街で個々人が堂々と行動すべきであるとも思う。

そう考えていると、段々と「歩スマーに意図的に激突し忠告して、スマホを壊滅させる」などということが人道的に最も正しいのではないかと思えてくるのだが、私は、そんな無駄な善行はしていない。

というのも、カントの「善」論、義務論とは、「何かのために」、「誰かのために」などと理由をつけ、自分に酔いながら善行を行うことを善しとしないからである。ならば、そこに気づいたのであれば、かえって「無思考・無判断のまま、絶対悪だと思う人間に向かって問答無用に激突する」というのが、至上の道徳の実行であるということにもなる。でも、カントが根本的に述べているのはそういうことであるし、カント哲学の最大の長所にして短所は、そこである。

もちろん、普段から他人に関心がなく歩いている人が、他人の忠告の意味に気づくとは思えない。しかし、私個人としては、国内の歩スマーに対してそんな激突・忠告作戦をとるべきだと考えるかどうかは、やはり微妙なところである。せいぜい私も、口頭で簡単に注意する勇氣しか持たない。

しかし、種々のアンケートによれば、九〇%くらいが「自分の行動は危険だと思う」としながら、八〇%くらいが「歩きスマホをやったことがある」という結果となっている。私としては、同じ人間たちばかりがやり続けている一方で、一度危険性に気づいてその後はやめたという人たちが大勢いるのではないかと予想する。

歩スマーに憤りを覚えるのは、「この社会の構成員たる国民個々人

の、生まれ持った身体で懸命に歩行し通行する精神が組み合わさって生じる、阿吽の呼吸の平和的な結果としての「プライベートスペース」に身勝手に入ってきて、その温かみを台無しにするからだ。家族関係でも、恋愛でも、上司と部下の関係でも、人間関係なら同じことだ。

ロシアが平気でトルコの領空に侵入したが、そのときはトルコは意図的に撃墜作戦を採用したのだった。個人の歩きスマホのレベルにおいても、小さいざわざばかりか、殴り合い殺し合いが起きるような事態になっているわけである。だから、歩きスマホ問題は、一方では自己責任、一方では日本人の道徳やマナー、日本に対する評価が問われる内戦である。

これで世界に向かつて、「お・も・て・な・し」などと笑顔で日本と東京をアピールしてしまったのだから、二〇二〇年までに何とかしないとイケない。歩スマーに罰金を課するのは難しいとしても、過料を課すのはよい案だと思う。

## 第六部 謹賀新年

二〇一六年一月一日 起筆、攔筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリックドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けましておめでとうございます。  
本年もよろしくお願い申し上げます。

## 第七部 遅い？新年の挨拶

二〇一七年一月七日 起筆、攔筆、公開

皆様

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

とは言っても、毎年迷うのが挨拶の仕方、季節のマナーです。今日からは、年賀状への返信などは、寒中見舞いになりますね。しかし、これも人によって感覚が違わらしく、一月五日から寒中見舞いだという人もいれば、一月十五日あたりでも「明けましておめでとうございます」と言う人もいます。こういう場合は、送る相手の社会的地位、マナー感覚、普段の性格、日本語の癖などから類推して文面を変えたり変えなかったりする、というところに落ち着くのが「マナー」かもしれません。

このほか、「新年明けまして」は間違いで「明けまして」で始めるのが正しい、目上の人には「迎春」では無礼で「謹賀新年」が正し

いなど、注意すべきとされる点も色々ありますね。年賀状の相手を、「最初から送る人」と「もし年賀状を頂いたら返信する人」と「メールで新年の挨拶を送る人」と「新年の挨拶自体送らない人」とに分ける作業も人によってはあるでしょうが、もはや分けるほどの人数に年賀状を出さない人のほうが多いはずで、私もそうです。

私としては、目下の人から「迎春」「新年明けまして」の年賀状やメールが来ても、「まだ（知識としては）日本語やマナーを知らないのだな」と思うだけで、言語能力やマナーがない人だとは思いませんが、古い社交辞令の知識が足りないことについては、年配の人、高齢者ほど結構な剣幕で怒る割合も高くなるので、注意するに越したことはないようです。

ただし最近では、こういった「人の顔色を窺って、良き社会人としての自分の立ち位置を維持する」社交辞令上のマナー（表向きのハードでフォーマルな面）よりも、例えば、独身者に対して家族の写真や裏に載せた年賀状を出さない、心身が大変な状況にある人に対しては、葉書での返信が大変な（暗黙裡に返送を強要することになる）年賀状よりも自分なりの言葉で温かいメールを送る、など、相手が置かれた状況についての内面的な（ソフトな面での）思いやりのほうが、人として大切だと思います。日本中、世界中の人々全員が正月を同じように祝っていると思うことが、最大のマナー違反と言えるかもしれませんね。

しかし、これも社会の上層部の年配男性や一般の高齢者ほど、後者（ソフトなマナー）よりも前者（ハードなマナー）を重視してい

るということは、社会に揉まれる中で如実に感じるわけで（冠婚葬祭、中元、歳暮など）、伝統的な社交辞令文化と新時代の挨拶マナーの程よい折衷文化が日本に起きるのは、もう少し先になるのだと予想しているところです。

一方で、このあと一月末の旧暦の元日に、旧暦で生活している和歌関連の数名の知人と新年の挨拶を交わすことになりましたが、これらの方々との挨拶も、次第に気軽なメールや新暦での普通の挨拶に移行しており、時代錯誤・時差ボケとさえ言えるような旧式の社交辞令は、もはやほとんど無くなっています。それでも、時候の挨拶、年賀状、冠婚葬祭、中元、歳暮、葬式仏教などが「社会人として守るべき日本の伝統」だと思っただけの新卒の若年者を叱っている企業の上司の皆様方、社会の上層部の人々には、それらのほとんどが明治の近代化によって初めて成立したものであることを知って、表向きではない旧暦生活の圧倒的な伝統を目にしていたきたいということ、しばしば思います。

ともかく、今のようない時代にあつては、どの世代が特に正しくて、どの世代が特に間違っているということはないと思うわけです。時代を知れば知るほど、何がマナーなのか分からなくなるのが奇怪です。

## 第八部 謹賀新年

二〇一八年一月一日 起筆、擱筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリックドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けましておめでとうございます。

本年もよろしくお願い申し上げます。

## 第九部 新型コロナウイルス感染症の蔓延とニーチェ哲学

二〇二〇年四月十二日 起筆、擱筆、公開

Twitter への投稿の転記

新型コロナ蔓延中の今、ニーチェのほぼ全著、オルテガの『大衆の反逆』、カネットイ『群衆と権力』などを読み返しているが、無論、彼ら慧眼の哲人が指摘した弱者・群衆道德の悪習以外の行動を大半の日本人が取っていないことを冷静に確認するためである。現政府も僧職的弱者道德者であると私は考える。

このような群衆や権力に最も厳しい弱者、畜群、群居動物、末人、僧職（的）などの名を与えたのはニーチェで、のちのハイデガーの「ダス・マン」よりも徹底して厳しい。「コロナ対策をしている私たち」という気取りによる政策、協力体制、絆の論理などは、ニーチ

エによれば弱者の欺瞞・偽善行動である。

強者・超人の生き方は、以前から自肅的であり、自分の気質に対して正直で清潔である。ニーチェが言う通り、高貴道德者たる強者・超人は、むしろ常に堂々と「善」価値ではなく「よい」価値に基づいて、権力を行使し、悪習に対して根本的に好き勝手に振る舞わなければならぬ。

この価値の体現者が一部のニートや引きこもりで、戦争や疫病の流行時に彼らの価値が上がると私は前から書いてきたが、この私の見解は、主観というより文明史観として概ね正しいと考えている。このような考えは、ニーチェ哲学の読み過ぎを一因として東大を中退してから、全く変わっていないようである。

卑近な例で言えば、数ある私の職場の一つは、職員の5割を年配・高齢女性が占め、普段から指をベロベロ舐めて重要書類をめくる癖のある女性とその半数を占める。高齢男性の上司も、銀行、郵便局、食料品店で前に並んでいる社会人や主婦を「わしは急いどる！」と怒鳴りつけ、平気で順番を抜かす。

コロナの影響で突然指を舐めなくなり、順序よく並ぶようになるうとも、上品で協力的で美しい人間になるわけがない。むしろ、そのような人間は指を舐め続けなければならないし、順番を抜かし続けなければならない。そのような群衆の平時の行動のみによって、当該感染症の危険性が根本的に解明される。

コロナ蔓延を機に自分の中の何かが修正されたり優しくなったり美しくなったり利他的になったと確かに自覚された場合、つまり成

長が感じられた場合には、これが終わるとまた下品になると考えた方がよく、そのような覚悟をコロナ以前から持つ人間の終始一貫した上品または下品な言動だけが、上品である。

ニーチェ哲学を読んでいる女性・巫女など、元から私が好き勝手に集めた「上品な」女性ばかりで成り立つ職場であるIAIでは、こういう会話がごく普通に通じるのをありがたく思っている。ニーチェ的。パースペクティヴィズム（究極の相対主義の絶対性、真理無き真理）自体を共有できる稀有な場である。